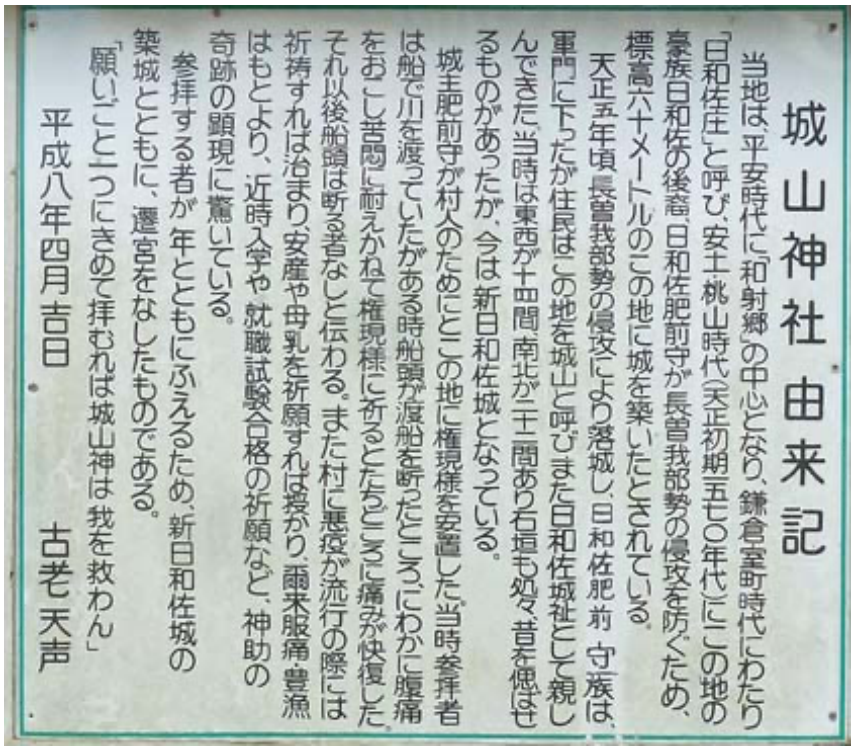
6634 kuraku 久楽日本の旅：四国路①・出会いの光景　004

山はみどり　野に花　人にはこころ



城山神社由来記

当地は、平安時代に「和射郷」の中心となり、鎌倉室町時代にわたり「日和佐庄」と呼び、安土桃山時代（天正初期五七〇年代）にこの地の豪族日和佐の後裔、日和佐肥前守が長曽我部勢の侵攻を防ぐため、標高六十メートルのこの地に城を築いたとされている。

天正五年頃、長曽我部勢の侵攻により落城し、日和佐肥前守族は、軍門に下ったが住民はこの地を城山と呼びまた日和佐城址として親しんできた。当時は東西が十四間、南北が二十二間あり石垣も処々昔を偲ばせるものがあったが、今は新日和佐城となっている。

城主肥前守が村人のためにとこの地に権現様を安置した。当時参拝者は船で川を渡っていたがある時船頭が渡船を断ったところ、にわかに腹痛をおこし苦悶に耐えかねて権現様に祈るとたちどころに痛みが快復した。それ以後船頭は断る者なしと伝わる。また村に悪疫が流行の際には祈祷すれば治まり、安産や母乳を祈願すれば授かり、雨乞服痛、豊漁はもとより、近時入学や就職試験合格の祈願など、神助の奇跡の顕現に驚いている。

参拝する者が年とともにふえるため、新日和佐城の築城とともに、遷宮をなしたものである。

「願いごと一つにきめて拝むれば城山神は我を救わん」

平成八年四月吉日　　古老天声